

皆様おはようございます。早いもので9月も最後の礼拝になりました。今年もあと3ヶ月と言う所です。朝晩だいぶ寒くなりましたね。昼間はそれなりに暑くなるのですけれども、寒暖差の激しいこの頃、風邪を引かずお元気にお過ごしいただきたく願っております。

引き続き使徒言行録7章、ステファノの説教を読み進めてまいりましょう。神様がイスラエルの民族をどのように導いてくださったか。そのことをしかと心に刻み、そして自分たちがその導き続けてくださって神様にどのような姿勢で応答しているのか。ステファノは自らの民族の同胞に対してそのことを歴史からひも解いて語り続けます。

先のことを語ってこいました6節『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』

7:7 更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』

今日の17節には神がアブラハムになさった約束の実現する時が近づくとつれ、民は増え、エジプト中に広がりました。

7:18 それは、ヨセフのことを知らない別の王が、エジプトの支配者となるまでのことでした。

やはりイスラエルの民族は約束された自分たちの場所に出ていくんだ。「この場所」というものがあるんだということが分かります。一時は食べ物の中でエジプトに行く必要があったのですが、それはその時のため、こうしてエジプトも救われて助かるのですが、やがて時が巡って別の、ヨセフを知らない王が出て来ると、残虐な行いをし、奴隷にし、虐げ、虐待するのですが、まさにそれこそが神様の約束の実現する時でした。イスラエルを救い、かつ残虐で恩知らずなエジプトの王とエジプトを詐欺く計画が共に成り立つという、神様のご計画には驚くばかりです。

7:19 この王は、わたしたちの同胞を欺き、先祖を虐待して乳飲み子を捨てさせ、生かしておかないようにしました。

7:20 このときに、モーセが生まれたのです。神の目に適った美しい子で、三か月の間、父の家で育てられ、

7:21 その後、捨てられたのをファラオの王女が拾い上げ、自分の子として育てたのです。

この時にまさにこの時モーセが生まれたのです。

今日の箇所では「時」と言う言葉が3回記してありますが、17節、20節、23節にあります。

17節と23節の「時」は、ギリシャ語でクロノスという言葉で、これは一秒一秒流れ行くときのことを指します。20節の「時」はカイロスであり、これは、その時に何事か千載一遇の出来事が起こる、そのような出来事が起こる時ということの意味します。

20節のこの時、虐げが増大し、そういうまさにこの時に、千載一遇の、いわば運命の存在であるモーセが生まれたということになります。

この20節であるこの「時」と言うのはただ単に何月何日何時何分と言うのではなくてその時歴史が動いたと言う、その時これが国の転換点となった大きな出来事となった、そのまさに時を大きく時代が動いたその時と言うことが出来るのです。

20節にあるこの時、モーセが生まれました。神神の目にかなった美しい子でした。彼こそがエジプトからの民の導き手となるわけです。

7:22 そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。

7:23 四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思ひ立ちました。

数奇な人生です。3ヶ月の間は実の家で育てられましたが、王の命令に聴き従わなければならないので捨てられてしまいます。しかしファラオの王女が拾い上げ自分のこと育ててエジプト人のあらゆる教育を受け育つという、本当に不思議な導きを得るところとなりました。

そして素晴らしい話や行いをするものになりました。口語訳では「言葉にもわざにも、力があつた。」とあります。これはギリシャ語では、力があつたという言葉は、可能性を持っていた、力強かつた、物事を成し遂げる力があつた、影響力があつた、指導力があつた、力強い熟練した信仰深い人であり、そういう力を持って言葉にも業にも力のある人だったという意味であり、その言葉に威厳があつて、ただのからっぽの言葉ではなくて、行いが伴っていたという意味かと思ひます。イエス様も言葉に行いにも力があつたと言うふうに紹介されています。そういう、王の家で生まれて何不自由なく教養にも力にもある人はしかし40歳になったときやはり自分の出自のゆえ民族を助けようと言う思ひに駆られるようになるわけです。住みよいところを捨てて立ち上がり、イスラエルの子らを助けようと思ひ立ちました。御座を捨てて人となせれ、十字架にまでおつきになられたイエス様のことを思ひ起こします。

それもまた1つの「時」でした。モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思ひ立ちました。彼はついにその「時」立ち上がったのです。神様の

お導きの中にあつて彼の時がやってきました言葉にも行いにも力のある彼が立ち上がるならば大きな影響力を及ぼすはずでした。

そして彼はそのような目で自分の民族を見渡したときにエジプト人が酷い目に合わせ虐待していじめているの見、それを助けて仇を打ち、仕返しをしたここには記してあります。

7:23 四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思ひ立ちました。

7:24 それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。

7:25 モーセは、自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思ひました。しかし、理解してくれませんでした。

彼は義憤心に駆られ、正しい行いを行つた、「自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思ひました。」思ひましたが、それは違つていました。

7:26 次の日、モーセはイスラエル人が互いに争つているところに来合わせたので、仲直りをさせようと言ひました。『君たち、兄弟どうしではないか。なぜ、傷つけ合うのだ。』

7:27 すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばして言ひました。『だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。』

7:28 きノウエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』

7:29 モーセはこの言葉を聞いて、逃げ出し、そして、ミディアン地方に身を寄せている間に、二人の男の子をもうけました。

「自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思ひました。」そしてモーセは仇討ちをしたのですが、そのことは彼の民族の人たちの心を打ちませんでした。そればかりか、仲間同士でのめごとのゆえに仲裁に入ろうとした彼を、悪い方の人ではありますが、彼はモーセを突き飛ばして、『だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。』

7:28 きノウエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』とののしる言葉を浴びせられようとは、彼は予想していたのでしょうか。

「自分の手を通して神様が」とは考えましたが、そのモーセの心にうぬぼれはなかつたのでしょうか。こうして彼は逃れるものとなりました。

ローマ 12:16 互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。

12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。

12:18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。

12:19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。

せっかく自分がその地位も立場もかなぐり捨ててでもこの自分の民族を助けるとひと肌もふた肌も脱いで立ち上がって彼らを助けようとしているのにどうしてこんなことを言われるのか。人をいじめている人からなんですけれども、自分勝手な正義のない人の言葉ではありませんけれども、理解されず誰がお前何かを我々の指導者や裁判官したのか偉そうにするなど、力にも言葉にも業にも力のあった彼の今までの歩みはガラガラと崩れ落ちてしまいました。

そしてメディアン地方に逃げ出して行かざるをえなくなりました。

しかしそれも神の時であったということを私たちは知るわけです。

コヘレト(伝道の書)3章にはこうあります。

3:1 何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

3:2 生まれる時、死ぬ時／植える時、植えたものを抜く時

3:3 殺す時、癒す時／破壊する時、建てる時

3:4 泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時

3:5 石を放つ時、石を集める時／抱擁の時、抱擁を遠ざける時

3:6 求める時、失う時／保つ時、放つ時

3:7 裂く時、縫う時／黙する時、語る時

3:8 愛する時、憎む時／戦いの時、平和の時。

3:9 人が労苦してみたところで何になろう。

3:10 わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。

3:11 神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

何事にも時があり、天の下の出来事には全て定められた時がある。神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

しかし神様はその時に至って時に至っていつも私たちに最善を思い測っていて下さるということを心に留めましょう。私たちが現実を理解できない時にも、失意の時にも信じ続けていこうではありませんか。復讐は私のすることで

ある、私自身が報復するとローマ書 12 章などに書いてありますけれども、自分の手を通して救おうとしておられるとの義憤心に駆られる時があります。

自分の手、私たちの手を通して神様がそれを用いられるならばそれはその通りなのかもしれませんがそこに自分の思いが加わるときに神様の御心を果たしえない時もあるかもしれません。

しかし私たちが祈り何が正しいかと言うこともやがて後の時にならなければわからないことなのかもしれません。何でこんなに自分がやってるのに空回りするのかと祈り続けて、どうして裏目に出るのかと悩むこともあります。それのことによって自分を責めると言うこともあるかもしれませんがすべては神様の時の中にそれもこれも用いられている事を思います。

そして逃げ延びて行くモーセでしたが、そこで出会いがあり子供が生まれそして神様の癒しがあり学びがあり、エジプトの王の娘の子として育ったその出来事からもう一度神様は、教えと訓練を経過して立ち上がっていくその充電の時として下さいました。

私たちはいつも神様の時の中に置かれていると言うことを心に刻みましよう。分からないことだらけですけれども一瞬一瞬神様にゆだねて、時を用いて私たちを導いて下さる神様であると固く信じ心低く悔い改めて、いつも神様の時にあって、み旨を求めながら謙虚に進ませてもらいたいと願います。